

「理解するとは変わることであり、 自己の彼方へ行くことである」

(サルトル)

～ベトナム人看護師養成支援に関わって

NPO法人AHPネットワークス専務理事 二文字屋 修

はじめに

元来ニンゲンはわがままなものだが、病気になって気がふさいでいる時とか、今まで動いていた手足がにぶくなり老化に向き合わなければならぬときなど、自分自身を受容することがとりわけ難しくなってくる。そういう人を相手にする看護や介護の仕事には、とうぜん向く人とそうでない人がいる。

不況に強い職業といわれ、一生ものの資格といわれ、いつも人手不足といわれる医療・福祉の仕事。しかし「とりあえず資格でも」という軽い気持ちにミスマッチが生じかねない。ではどんな人に向くのだろうか。答えは、長く続けられる人が向くのである。「ええっっ、そんな!!!」と言われてそうだが、しかし、そうなのである。やってるうちに好きになってくる。「いつの間にか10年経っちゃった。だって患者／利用者さんが私を待っていてくれるんだもの」。

そういう抜き差しならぬ人との関係に、自分を差し出すことが苦にならない性格。あるいはへこたれない自分。あとは好きかどうかだ。やってみなければ分からない世界だから、離職者も多くなるのは当然である。

ベトナム人看護師養成支援事業

私はその分野の者ではない。1994年に民間が立ち上げたベトナム人看護師養成支援事業(注)に係わり、彼女たちに日本語教育や看護学校入試や留学や病院勤務の支援を通してそう思うようになったのである。これは61名の若きベトナム人が日本の看護専門学校や大学等に留学して看護師資格を取得し、看護師として異国で働くという事業である。



がんばった3年間、卒業式の笑顔

しかし留学中に5名がリタイアした。その理由は、自分は看護に向くのだろうか、という根本的疑問が解けないところにあった。根源的であるがゆえに多くの日本人学生もこのドツポにはまりこむ。自分で解くしかない問いであるが、ただ両者には違いが見えた。日本人学生の多くは自信のなさに悩むが、留学生は自分より大きなものを背負っていた。といっても、「家族を養うために海外で働いて、だからちょっとやそつとでは辞めないハングリー精神があるのよ」ということではない。石の上にも3年、そこにたとえ我慢してでも居続ける自分を、プライドとして持てる精神性。良くも悪くも自分で決断した事柄に関してはプライドをかけて自己を保つ姿勢の自律性、その所在に悩むのである。

えてして「プライドが高い」人が好まれない社会に生きてきた私にとって、それと真逆のベトナム人たちとの関わりは摩擦の連続であった。問題に直面したとき、私の後ろ盾は「相互理解」、いっぽう、彼女たちには「プライド」。両者対決のとき、ホスト側の私が見せる歩み寄り、それがいつしか卑屈へと墮してしまう自分が厭だった。相手は歩み寄ってはこない。守るべきものがはじめから明確なのだから。妥協という発想はない。ここで両者の力関係を左右するのは、どちらにより多くのダメージが生じるかである。私はあるとき冗談紛れに聞いてみた「ベトナム語に郷に入っては郷に従え、ということわざある？」すると「もちろんあるわよ！」との返答に、いささか目まいがしたものだ。

(注)「ベトナム人看護師養成支援事業」は、1994年にAHPネットワークとベトナム医療省が協定を結び、日本の厚生省認可事業として始まった。ハノイで17カ月間事前教育（日本語、数学、化学、英語、国語）を行った後、日本の看護専門学校等に留学して看護師資格を取得し、民間病院に就労して看護スキルを身につけて帰国。ベトナムの看護医療人財育成を目的とした事業。1期生（2000年）から8期生（2007年）まで56名が看護師資格を取得して秋田、千葉、大阪、広島、山口、高知など各地の病院で活躍。
<http://ahp-net.org/Vietkango1992-2010001.pdf>



ほうれんそう（報告・連絡・相談）はプロでも原則

プライドを共有して

民間が行う支援は1対1の関係がより密接であるために、おのずとそこには必死さというか、ドロ臭さのニオイが出る。それをなるべく薄める受入れの在り方が良いかのように考える人が多いが、それは錯覚である。例えばEPAによる看護師・介護福祉士候補生を受け入れている施設内で「あの人たちにそんなに教育費用をかけて、何になるのよ。試験に落ちたら大損じゃない。そんなら私たちのボーナス上げてよ」というのは当然のはなしであるし、このときこそ受入れ側にとって貴重な議論がなされるチャンスなのだが、そういう労働者のジレンマをあらかじめ回避するため公立での受入れを推進してきた面がある。

しかしここに見えるスマートさは、候補生と直接向き合うことになる日本人パーソンの「覚悟」を薄めてしまうことになりかねない。それは彼／彼女らと相対する必死さに影響する。こと人財育成に関しては、余裕のあるところになれあいが生じてくるもので、それをムダと呼ぶのが最近の流行だが、しかしこのムダを省いて効率性を上げようとしては、人は育たない。テマ、ヒマ、カネが掛かるのが人財育成の世界。

例えばベトナム人看護師養成支援事業では、1人の看護師が誕生するまでに多くの費用がかかった。民間がそこまでやる必要はないといわれればそうだが、そこには人を育てる意気込みと夢があ

った。それを後押しするプライドがあった。そのプライドを共有する民間病院があり、多くの関係者が志をひとつにしていた。だから事業が成り立ったのである。事業収支は大幅なマイナスであったが、やってみなければ残せない大きな遺産があった。そのひとつが、外国人が日本の病院で日本の患者さんを見るができること。同時に日本の患者さんも彼女らを違和感なく受け入れていた、というシンプルな事実を示すことができたことだ。

一方、支援事業の中心者であるベトナムの参加者たち。彼女たちにとって、いや参加した一人の個人にとってこのプログラムは何をもたらしたのか。看護が天職になったという人もいればそうでない人もいる。引き続き日本で働く人もいれば帰国して日本語力を活かす人、看護職に就いている人、第三国に行った人とさまざまである。文字どおり十人十色の歩みがそこにある。各自が人生で大きな選択に迫られた時、他者からの情緒的言葉を脇に迫りやる強さを、私は幾度となく目のあたりにした。まさにハングリー精神がいきいきとしてくる瞬間である。

多文化共生を担う日本人

もう一つの遺産、それは日本人が思っているほど日本は特殊でも特別でもない、というあたりまえのことだ。ただ我々はこのテーマに関して経験が少ないだけである。経験知を各国の先事例で補おうと研究しても残念ながら前進するパワーとはならない。それぞれがお家の事情を抱えながら外国人財を受け入れているのであるが、むしろ日本はそれを明確化しないどころか、建前論が正当化され、本音で論ずることに腰が引けてしまい、結果、大きな魚を掴み損なっているように思えてならない。

国際会議などでグローバルな労働者の移動になると、日本はテーブルにもつけないといわれるが、それが海外から見た日本の実像であろう。異文化との関係を作ることが苦手な国家として認識されているのだ。しかし悲観論ばかりではない。そう



看護記録も終わり、一日ご苦労さん

いう日本にあっても多様な文化背景をもった個人と向き合い、多文化共生を担う一人ひとりがあること、その存在は大きい。たとえ小さな日常の仕事であっても、それを享受する外国籍住民にしてみれば大きな恩恵である。そういうつながりこそ閉塞化した地域を照らし出す光源になりうると思う。異文化交流は楽しいばかりではない。アタマで受容してもココロでは戦っているのだ。その自己矛盾から逃げ出さない強さ＝プライドが、活きる力になるにちがいないと確信している。

われわれの支援事業で看護師になり、日本に定住してお母さんになった人たちや地域の国際交流協会でボランティアをしている人たちがいる。支援を受ける自分から与える自分が変わっていく姿は、私にとって大きな励みであり、そういう生き方が社会に彩りを与えていくだろう。ベトナム人の看護師を育てるという事業は、そのような個人によって、次につながっていく。